

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第77号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1

巻頭言

ベトナムでの研修プログラム

松井幸一

Page 2

同窓会通信

カリキュラム雑考

刃田祐子

Page 3

卒業生だより

ユネスコエコパークのまちから地理学を考える

曾我 傑

卒業論文・修士論文一覧

Page 4~5

研究ノート

1970年以降の岸和田市における農業の変化

直 暁陽

Page 6

1泊バス巡検報告

播磨地方・瀬戸内東部沿岸の変貌

鈴木涼太

Page 7

今後の研究会行事

教室だより

Page 8

随想

東・東南アジアにおける治水・利水技術の歴史的展開

祖田亮次

Pages 2~3, 6~7

新入生からの

ひと言

●巻頭言●

ベトナムでの研修プログラム

松井幸一

昨年と今年にわたって地理学教室では新たな試みとしてベトナム国家大学ハノイ理科大学地理学部と共同で研修プログラム「FIELD WORK AND MAPPING IN HANOI FOR KANSAI UNIVERSITY STUDENTS」をおこなった。この研修プログラムは希望する学生のみが参加する形であったため、参加者以外は研修プログラムで何がおこなわれていたのか知らないであろう。そこで今回はこの研修プログラムについて簡単に記してみたい。

研修プログラムは関西大学130周年記念事業の一環である「関西大学グローバル奨学金・援助金」制度を利用したものである。これは海外に派遣する学生に対して一定の奨学金が払われる制度で、他の留学プログラムと異なり、専修主体で研修プログラムが組める点が特徴的である。制度を利用するにあたって、まず受け入れ先として候補に挙がったのが先のベトナム国家大学ハノイ理科大学地理学部である。これまで関西大学地理学専修とベトナム国家大学ハノイ理科大学地理学部とは、長年の交流・留学生の受け入れをおこなってきたこともあって研修プログラムの受け入れには大変協力的であった。

研修プログラムでは、日本で学んだ地理学の基礎的調査法を学生が主体となって海外で試すこと、現地学生と協力して調査することを重視した。この2点をいかにおこなうべきかをベトナム側教員と相談した結果、ハノイの中でも旧市街と呼ばれる地域で土地利用・景観調査をおこなうことになった。旧市街はかつての商業地区で、今でも同業者ごとに商店が軒先を連ねる地区である。研修では最終的に地理情報システム(GIS)を利用した地図作成をおこなうという目的を説明し、学生自らがいかに調査をするかを学ぶという主題にそって、基本的には土地利用・景観調査の方法は教員側から指定せず学生自身が考える方法をとった。

実際の調査は日本人学生2~3人とベトナム人学生1人でグループをつくり、どのような店があるのか、その景観的特徴は何であるかにつ

いて一緒に調査をおこなった。学生が主体となることを目指したため、引率教員もあえて通訳等はせずに学生がどのような調査がしたいかを自分の口からベトナム側学生に伝えるように見守った。もちろんベトナム側学生とのコミュニケーションは英語でおこなうため、調査を始めた当初はお互いにぎこちない。しかし自分で説明しなければならぬとなれば自然と会話も増え、最初は大いに戸惑っていた学生たちであったが数時間もすると一気に親密になっていった。

現地調査と地図作成は概ね3~4日程度で終え、その他にはハノイ市街や博物館、陶器制作専門村のバチャン村、歴史的景観が残るドウオンラム村、ハロン湾などの巡検をおこなった。多くの学生がベトナムについては初めて訪れることから、ハノイを中心とした基本的な場所から一般的な旅行では行かないであろう特徴的な場所までをベトナム側教員に案内していただいた。この研修ではベトナム側案内者がいるため単なる観光とはならず、巡検先では歴史や村内の社会構造などが丁寧に説明され非常に良い機会であった。

2回の研修プログラムを振り返ると、全体としては大いに有意義な研修がおこなわれたと感じる。実験的ではあったが教員側が助調査方法の指示をせず、助言にとどめたことによって学生が自ら考え、動くという調査の基本について改めて学ぶ良い機会になったであろう。また引率者として同行した私にとっても、授業では伝えつもりであった基礎的な調査方法がいかに学生に伝わっていなかったかを痛感する良い機会であった。授業で教える難しさを感じるとともに、その改善方法の示唆に富むベトナムでの研修プログラムであった。

「関西大学グローバル奨学金・援助金」制度は関西大学130周年記念事業の一環であるため、2年に渡った研修プログラムは制度を利用した形では本年度で最後である。現在、国際部を中心として新たな制度の策定が目指されている。どのような形になるかは現状では不明であるが、可能であれば引き続き研修プログラムをおこない、多くの学生が実際に学んだ事を自ら考え行動する機会としたい。

(まつい こういち: 本学助教)

石田大貴

趣味は音楽を聴くことと、ドライブ、野球をすること、観ることです。大学では交通に関することを調べていきたいです。よろしく願います。

石渡正敏

地理に関する知識は全くありませんが、興味があります。よろしく願います。

井野 厚

地理に関しては、小さい頃から両親が西日本を中心に色んな所に旅行で連れて行ってくれたので、それなりに興味があります。せっかくの大学生活ですし、良い先生、良い友達に出会って良い思い出をつくってあげたらと思います。

大浦 拓

高校時代から軽音楽部に入ってドラムをやっている、現在でも Mountain Dew というサークルに入っています。マンガを読むのが好きなので、オススメなどあったらしゃべりかけてほしいです。よろしく願います。

桐山哲久

広島県出身です。趣味は運動とぶらりひとり旅で、色んな所に行きます。よろしく願います。

なんとなく大学で、地理を専攻したはずだったのに、いつしかそれを生業とするとは、人生はつくづく不思議だ。気づけば高校教師の生活も来年は30年目、引退する日も近づいてきた。高校教師の道を選んだのは、その年度に地理で募集があったことと、「地理は面白い!」ということ伝えてたくって、というオソロシイほど単純な理由。大阪市に採用が決まったまではよかったが、教育現場における地理をめぐる環境は悪化の一途だった。今日までカリキュラム改訂に翻弄されて、私自身が1970年代に高校で経験したような地理教育とはほど遠く、伸び伸び授業させてもらえたわけではない。

文部科学省(文部省)はおよそ10年毎にカリキュラムを改訂する。高校で教鞭をとり始めた直後、平成4(1992)年の改訂で、「社会科」という教科は「地理・歴史科」と「公民科」の2教科設定となった。それに伴い教員免許も「地理・歴史科」と「公民科」の2本立てとなり、いずれか1つの免許状しか持っていないという若い先生が登場する。また、どういうわけか「地理・歴史科」の中で、「世界史AまたはB」が必修となり、「地理AまたはB」か「日本史AまたはB」のいずれか1科目を選択すればよいと格下げになってしまったのである。「公民科」の方は「現代社会」1科目か、「政治経済」と「倫理」の2科目かが義務付けられたのとは勝手が違う。「地理切り」と言ってもよい処遇だった。大学で歴史学専攻した先生にとっては「地理」は鬼門のようなもので、この改訂は安堵をもって受け入れられたかもしれない。学ぶ側からすると難しくない科目であっても、教えるには何かしらハードルが高く感じる科目らしい。地理学専攻の私にとってはま〜たく理解できないが、次年度の授業担当を決める時、必ず年配の先生は「地理以外で!」とおっしゃる。結果、地理がカリキュラムにない高校も出てきて、こうなると理系学部志望を除けば多くの高校生は、「世界史AまたはB」と「日本史AまたはB」を履修するのが一般的になる。ちなみに理系志望生徒にとっては、センター試験で攻略しやすい地歴・公民科の科目が地理だという。

私が最初に赴任した大阪市立南高等学校は、文系の専門学科の高校だったが、センター試験

を受ける生徒や国際的なことに関心のある生徒のおかげで、必修科目から選択科目に変わっても、それなりに存在感があった。そういえばたった1年だけが日本史選択者数よりも多かった年もあった。しかし、大半の年は私立大学の受験科目には含まれていないこともあり、(関大はエライなあをつくづく思います)、少人数で寺子屋スタイルは楽しいけれどもチョット寂しい科目になってしまった。世界史を必修にするなら、地理的空間認識も必要でしょうとぼやいても、地理の復権は儂い夢でしかなかった。

「平成32(2020)年」の改訂(実施は平成34年入学生から)は久々に大きな変化をもたらしそう。あつこれは地理にとってである。ただし、地歴科全体としてみれば吉か凶か判断しかねるが…。「地理総合(仮称)」という科目で悲願の?必修となる。歴史はというと、「歴史総合(仮称)」となり、世界史と日本史が統合するというよりも、日本に軸足を据えての近現代史が必修となるようだ。「地理総合」は現行の地理Bのうち、技能を扱う分野を中心に学び、持続可能な社会づくりに必要な地理的な見方や考え方を育むらしい。しかし今度は、「技能を扱う分野」に対応できる先生を十分に確保できるかが課題になるかもしれない。地歴・公民科の三十代位までの先生の多くは、そもそも高校で地理を学んでいない。今までは年配の先生が「地理はちょっと〜」とおっしゃったのが、今度は若い先生にも敬遠される可能性が出てきた。これじゃあ看板をあげてもらっても、看板に偽りありとのそしりを受けかねない。前途多難な様相だが、自身の現役生活の終止符との兼ね合いでチョット傍観モードでいる。

それはともかく、「地理的技能を磨くにはやっぱりフィールドワーク!」と、ここ数年、大阪府高等学校社会科研究会の見学会のお手伝いをさせていただいています。毎年11月下旬(今年は23日)に一般の方も参加可能な巡検を企画しています。今回は「大阪開港150年にあわせて」をテーマに計画中です。大阪府ホームページでも広報しますので、お時間が許せば是非ご参加ください。こちらは看板に偽りなしです。

(ただ ゆうこ:大阪市立汎愛高等学校教諭,1985年学部卒・89年博士課程前期課程修了,後期課程は単位取得後中退)

■ □ 卒業生だより □ ■

ユネスコエコパークのまちから地理学を考える

曾我 傑

私は、宮崎市の北西約 20 km に位置する綾町で、地域おこし協力隊として役場で働いています。綾ユネスコエコパークの周知活動、地域のイベントや協議会の事務局運営、綾ユネスコエコパークセンター（仮称）の設立準備などが主な業務です。

ところで、「ジオパーク」や「世界自然遺産」に比べて「ユネスコエコパーク」は聞き慣れない言葉であると思います。ユネスコエコパークとは、生物多様性の保護を目的に、自然及び天然資源の持続可能な利用と保護に関する科学的な研究を行うユネスコの政府間事業（MAB 計画）の 1 つです。人と自然の共生を目指し、その実現に向けて取り組むモデル地域としてユネスコが登録します。自然生態系の保護・保全に加えて、持続可能な利活用の調和を目的としており、このようなモデル地域が世界中に増えることで、持続可能な社会の実現を目指しています。

大学・大学院の時、自然災害で毎年のように公共交通が寸断される宮崎県の 2 つの地域において、通学への影響度や地域社会の対応（鉄道復旧の断念など）をテーマに研究を行う中で、自然の脅威を感じたこともあります。一方で、巡検や調査で、地形を利用した城郭、気候を生かした農作物・特産品の生産など、人々が昔か

ら自然をうまく活用して生活する姿も見てきました。歴史や文化、その背景にある自然環境を無視して人は生きていけないと感じてきた私にとって、現在の職場はその考えを活かせる場所でもあります。最近、次世代を担う人たちに、自分の生まれた町の環境を知って大切にして欲しいという想いから、教員の経験も活かして環境教育に力を入れ始めたところです。

さらに、教室の皆さんや調査先の方々と飲みながら楽しく語ったことも良い思い出で、研究だけでなく人生についても教えていただきました。その経験を踏まえ地域の行事には積極的に参加し、飲みながら語ることを大事にしています。ただ飲むのが好きなだけかもしれませんが…。

紙面の都合で割愛させていただきますが、この地理学教室では多くの人に出会い、色々なものに触れ、地理そのものだけでなく生き方を学ぶことができました。皆さんも、地理学教室を通じた出会い（人だけでなく物などもあると思います）のなかで、人生のヒントを得ることができればと願っています。すぐではないかもしれませんが、私のようにどこかで役立つ機会があるでしょう。

（そが すぐる：2005 年度学部卒・2007 年度博士課程前期課程修了）

黒木玲衣

卒業の際に、地理学専修でよかったと思えるような大学生活にしたいと思っています。よろしくお願ひします。

外木場浩太郎

兵庫県神戸市出身で、中学校・高校とバスケットボール部に所属していました。よろしくお願ひします。

田中竜人

高校では地理をやっていないので、地理については詳しくないですが、みなさんにしっかりとついていけるように頑張りたいと思います。よろしくお願ひします。

辻本真由

大阪府出身で、趣味はサッカー観戦です。年に 1 回関東の方へ旅に出ています。地理の事はまだまだ未熟ですが、少しずつ学びを吸収していこうと思います。よろしくお願ひします。

辻本 優

中 1 頃からずっとギターをしていて、大学では“groove”と“Mountain Dew”という 2 つの軽音サークルを掛けもちしています。無双家が大好きです。お腹が弱いです。よろしくお願ひします。

(p.6 につづく)

卒業論文・修士論文一覧 (2017 年 3 月・9 月卒業, 修了生)

【卒業論文 2017 年 3 月卒業】

- 大西 沙季 人口減少地域における住民の生活行動の変遷と現状 - 兵庫県姫路市夢前町前之庄地域を例に -
 松尾 絢斗 ヒップホップを生み出した地域的基盤についての研究
 森本 翔 明治時代初期に訪れたイザベラ・バードの日本観“Unbeaten tracks in Japan”より読み解く
 池田 航大 大阪府のプロ野球専用球場の盛衰とその土地利用の変化
 伊佐 嘉真 過疎地における高齢者の心とからだの健康を支える住民のきずな
 - 京都市左京区静市静原町の生活世界と語りから -
 小川 諒也 GIS を用いた城下町の空間分析 - 津城下町を事例として -
 木下 雄太 琵琶湖北湖岸低地の残存バイカモの分布とその環境要因
 迫田 雅彦 日本における LRT の発達と現況 - 19 事業者の分布と万葉線・阪堺電気軌道の比較 -
 佐藤 寛哲 門真市における蓮根栽培の歴史・現状とその文化の継承 - 茨城県主産地と比較して -
 力石 亜海 道頓堀界隈の空間利用の変遷と庶民文化
 - 芝居小屋・芝居茶屋・カフェ・食堂・ドラッグストア -
 戸高 幸星 戦後 70 年の遺骨収集の行方 - 沖縄県糸満市の事例 -
 森元 一登 若者の和菓子の嗜好性と喫食頻度に関する研究
 山口 翼 大阪堀江の商業利用の拡大と利用者の特性 - 南堀江を事例として -
 高坂 百加 大阪府主要都市の校歌から見た地域イメージ

【卒業論文 2017 年 9 月卒業】

- 西田 元気 国内離島部の移住者の実態 - 奄美大島龍郷町での聞き取り調査を事例に -

【修士論文 2017 年 9 月卒業】

- 榮 蓉 客家における四川客家の文化類似性と差異

1970年以降の岸和田市における農業の変化

直 暁陽

1. はじめに

江戸時代以降の岸和田地域では、米よりも木綿、みかん、たまねぎ、甘蔗などの商業的作物が農業の中心であった。明治中期以降、甘蔗や木綿の栽培は衰退し、米＋野菜・果樹と農外就業を組み合わせたパターンが優勢となる。1970年以降、繊維産業の衰退や市場環境・生活環境の変化によって、農業と繊維産業との結びつきは弱まっている。しかし、岸和田市は現在でも大阪府下で農業生産所得は堺市に次いで第2位を保持し、府下では近郊農業がさかんな地域である。本稿では1970年代以降の岸和田市の農村の変化をとりあげた筆者の修士論文から、農業変化に関する部分を要約して提示したい。

2. 包近町のモモ栽培の展開

ここでは、岸和田市東北部、牛滝川の河岸段丘、河泉丘陵に位置する包近町^{かねちか}を例としてとりあげる。

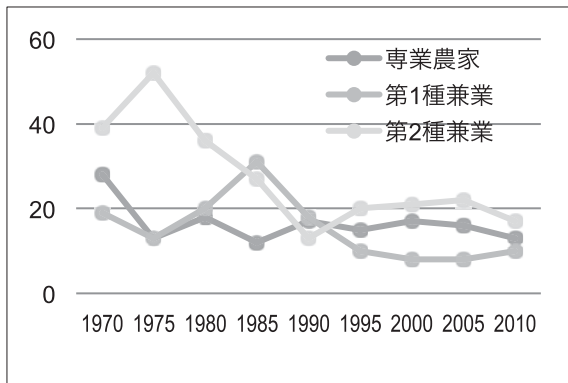


図1 包近町の農家数の推移
(各年次農業集落カードによる)

包近町は標高50～100mの平地・傾斜地に位置する。非農家数は1970年の124戸から2010年の389戸と約3倍に増加した。一方、農家数は2010年に販売農家数は40戸であり、1970年に比較して半数以下に減少した。2010年に農家数と非農家数の比率は約1:10であり、農業はここで非常に重要な産業を示している。専業別から見ると、畑町と違い、包近町では第1種兼業農家の割合が高く、2010年に全体の25%を占めている。1975年に、包近では第2種兼業率は66%と高く、その時に農作物の組み合わせは水稻、野菜類、みかんである。みかんの生産過剰と桃栽培の成功より、1975年以降に桃

に転作する農家が増加し、第2種兼業農家の一部が脱農化するが、専業農家の減少率は10～20%で安定している。

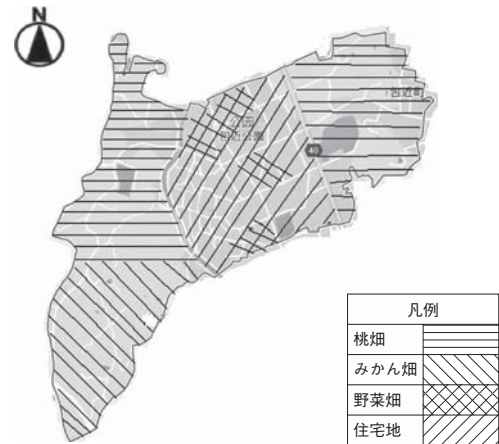


図2 包近町の土地利用図
(筆者調査)

包近町の土地利用図(図2)を見ると、住宅地が牛滝川と府道40号線の間に分布する。桃園は主に府道40号線の両側の段丘面に分布する。また、牛滝川左岸の丘陵部ではみかんが多く見られ、主に町の南西部の丘陵の斜面に分布し、北西部の斜面には桃の樹園地が広がる。稲作や野菜類が少ないが、住宅地の中に細かく残存している。全体として、包近町で桃が圧倒的に多いが、これはみかんからの転作である。現在(2016年)、包近では約23haの桃園があり、糖度の高い桃として市場での付加価値が高い。しかし、労働力不足、農家の後継者不足などの問題は解決されていない。



図3 包近町の桃園
(筆者撮影)

3. 都市化に対応する農業

岸和田市は大阪市の都市化の影響を強く受けた地域で、農業は1970年代以前と比べて衰退傾向にあるが、なお一定の重要姓を持っている。本地域では兼業によって農業の継承がなされ、基幹的な後継者も数は少ないが育ってきている。

①農家の兼業の変化

市街地周辺では定年になって帰農する人がほとんどである。農家の兼業は、貸しガレージやアパート経営によって都市化に対応しており、土地の値上がりを期待している農家も多い。

一方、山麓部では、戦後から農村工業としての機業との結びつきが相対的に強く、水稻、みかんを中心に栽培してきた地域である。現在では、農作物は収益の高い野菜、いちごなどに転作し、農産加工（みかんのジャム、ドレッシングなど）6次産業を積極的に取り組んでいる。専業農家14戸のうち3戸が観光農園を開設し、直販を経営する農家は9割を超える。阪和自動車や国道170号線沿線に多く分布する。大沢町のような主道路から離れている地域では貸農園や観光農園の経営が難しいが、農産物加工を行なう経営体数が多く見られる。

以上のように都市化が進んでいるところでは農業も衰退が進んでいる。農地転用がすすむなか、残った農家は、さまざまな兼業や栽培作目の工夫によってより農業からも高い収益をめざしている。

②愛彩ランドの設立

小規模な農家にとって、地元の農産物が直売ルートを経由することで、利益率とフットワークが高まり、地域農産物の販売で収入を伸ばすことが可能になった。2011年4月に大阪府内8番目の「道の駅」として開業した「愛彩ランド」（岸の丘町）はJAいずみのが経営する。農業協同組合出資の直売所は規模が大きく、レストラン、鮮魚直売“地域応援館”などもある総合的農産物直売



図4 愛彩ランドの野菜売り場
(筆者撮影)

所である。

総面積は約4.4haで、その内、直売所の面積は約300坪で、府内の「道の駅」でいちばん規模・売上げが大きい直売所である。出荷登録者主に岸和田市、貝塚市などの農家で、出荷者数は毎年が増加しており、ここを主たる販売先にする基幹農業者もいる。農産物直売所以外にも体験交流館、手作り工房で消費者と生産者とお互いに情報の交換できる。生産者は持っている知識を消費者に伝え、逆に消費者の望む農産物や地域の加工品などに対する期待できる。それらの地域情報により、販売量増加させた上に農家の安定性を確保でき、農産物加工品生産などの6次産業を発展させることで、地場産業の形成や拡大に有利である。

4. 終わりに

岸和田市は農業と軽工業（繊維工業）の結合との有機的な結合が本地域の特色であった。現在、人口、産業構造が都市化の影響を受けて生活環境が激変したが、市内の中間地域では農業現在でも有力な近郊農業地域となっている。都市化によって新鮮な野菜・花・果樹を欲する消費者が身近に増えてきたこと、農業の6次産業化の進展も残存要因の1つである。それは都市化の農村、農業への両方向への作用である。農村が都市化の影響で、農業が衰退していることは事実であり、農村社会の変化も少なくないが、たくみに適応しながら、主体性を失ってしまうことはなかった。また、近郊農業の有利さを十分に利用し、新たな機能が付け加えられている。農村社会の生活様式は変化してきたが、農村の本質は現在でもなお変わっていない側面が岸和田市にはみられる。

参考文献

- 青木伸好・橋本征治・大石幸夫・平岡昭利・柿原昇「都市化に対応する農村地域の分析－岸和田市における事例」、史泉第53号、1979、1-49頁。
青木伸好『地域の概念－都市と農村の関係において－』大明堂、1985、全342頁。

[付記]

本稿は2017年1月に提出した修士論文「岸和田市の農村変化の諸相－1970年以降を中心に」の一部をまとめたものである。

(ちよく ぎょうよう：2017年3月本学文学研究科・博士課程前期課程修了、(株)日住サービス勤務)

丹尾早由里

京都府京都市出身です。中学と高校はバトミントンをしていたので、するのを見るのも好きです。行ってみたいところはスペインとニュージーランドです。よろしくお願ひします。

橋 一輝

阪南市出身で毎日2時間かけて通ってます。野球(阪神)とプロレス(新日本プロレス)が好きでよく見えています。よろしくお願ひします。

花井高志

僕は鉄道が好きで、青春18きっぷで日本中を旅行することが好きです。地理学・地域環境学専修で、地理を学び将来は鉄道関係の会社に就職したいと考えています。

藤崎 茜

山形県出身です。自然地理に関心があり、空き時間は数学や物理を勉強しています。事象の原因を考えることが好きです。趣味は電車に乗ることと地図を眺めることです。変人ですがよろしくお願ひします。

町田路朗

信州出身です。旅・温泉・秘境・道路・村落・登山・テント泊・地形図・大相撲観戦などが好きです。よろしくお願ひします。

■ □ 1 泊バス巡検報告 □ ■

播磨地方・瀬戸内東部沿岸の変貌

鈴木 涼太

2017年5月20日(土)から5月21日(日)、私たちは播磨地方の瀬戸内東部沿岸の変貌を学ぶため兵庫県高砂市、姫路市、赤穂市、たつの市への巡検に大型バス1台で行きました。20日の朝、私たちは大阪駅前のバス駐車場に集合してバスに乗り阪神高速道路を通過して高砂海浜公園に向かいました。指導は、伊東・野間教授です。ここでは公園内を散策し、播磨臨海工業地域と高砂海浜公園について学びました。巡検当日は天気も良く、砂浜では多くの人潮が潮干狩りを楽しんでいました。

たつの市御津町黒崎の瀬戸内海が一望できる新舞子ガーデンズホテルでしゃれた昼食をとった後、たつの市室津に向かいました。ここは瀬戸内海における古代以来の重要な港町です。室津では室津海駅館を見学し、海の宿駅として栄えた室津の歴史を学びました。江戸後期ここに建てられた建物を増築して資料館にしているということで、職員の方の建物自体が資料であるという言葉が印象に残っています。赤穂市坂越では旧坂越浦会所・奥藤酒造郷土館を訪れ、伝統的建造物による風情ある街並みを見ることができました。

その後、赤穂市立海洋科学館・塩の国を見学しました。ここでは塩づくりの歴史や瀬戸内海の生い立ちについて学ぶことができました。また、実際に塩田を見ることができました。今や日本人の食事に欠かせない塩ですが、塩づくりについて今まで詳しく学んだことがなく、また塩田を見たのは初めてだったので貴重な経験になりました。

最後は赤穂市立歴史博物館を訪れ赤穂の歴史について学びました。自分は忠臣蔵を見たことがあったので、赤穂義士に関する資料は特に惹きつけられました。またここでも塩に関する展示があり、赤穂を学ぶ上で塩は欠かせない重要なものであると考えさせられました。ここで日帰りの2回生やOBの方は大阪駅へ戻り、宿泊する3回生、院生・教員は宿舎となっている龍野の赤とんぼ荘へ向かい夜は赤とんぼ荘でコンパをしました。

21日は朝から宿舎のバスで龍野の城下町へ

向かいました。ここではまずヒガシマル醤油株式会社うすくち龍野醤油資料館を訪れました。資料館では仕込み蔵や压榨場などを実際に見ることができました。また街の中に醤油の自動販売機があり、龍野と醤油の深いつながりを実感しました。

その後城下町を散策しました。武家屋敷や白壁の土蔵が現在も残っており、「播磨の小京都」と呼ばれる街並みを見てまわることができました。そして最後に龍野城へ行きました。内部は見学しませんが、城は少し高いところにあるので龍野の街並みを眺めることができました。

今回の巡検は瀬戸内東部沿岸部の歴史を実際に見て学ぶことができ、大変有意義な巡検となりました。また私たち3回生にとっては初めての泊りの巡検であり、秋の尾道実習調査に向けてよい経験となりました。尾道実習調査は私たち地理学・地域環境学教室の学生にとって最も重要な活動の一つとなるので今回の巡検の反省を活かせればと思います。



龍野城下町の街角にて



赤穂市立海洋科学館・塩の国での流下式塩田の屋外展示

(すずき りょうた：本学3回生)

今後の研究会行事

1. 秋の日帰り巡検のご案内

毎年恒例となっている行事となっている日帰り巡検を以下の要領で実施します。今回は中河内のどまんなかで河内音頭発祥の地、3つの寺内町をもち、旧大和川の分流が流れ、江戸時代は日本綿作の中心地であった八尾市の新旧の景観を歩いて確認します。近代以降は内陸工業地域となり、その跡地の再開発などが八尾駅前で見られます。ひとりでも多い卒業生、現役学生、大学院生の参加をお待ちしています。

テーマ：八尾市域の過去と現在を歩く

日時：2017年10月8日（日）10時～17時（予定） 雨天決行

集合：近鉄信貴線「服部川」駅 10時

近鉄鶴橋から大阪線普通または区間準急で近鉄河内山本駅へ、そこで信貴線に乗換で次の駅が「服部川」です。改札口を出た付近で集合。

※近鉄鶴橋から大阪線普通または区間準急で約30分

9:27（普通高安行）-河内山本9:49 乗り換え9:54-服部川9:57 運賃300円

コース：近鉄服部川-大窪地区（花き・植木、扇状地）-八尾市立歴史博物館（綿作・高安山・大和川・古墳展示見学）-近鉄服部川駅-（近鉄信貴線）-近鉄河内山本駅-長瀬川旧河道住宅地-萱振（寺内町）-近鉄八尾駅北口（駅前再開発）-ファミリーロード商店街（河内音頭）-八尾市立図書館（今東光資料館）-大信寺（八尾寺内町）-久宝寺寺内町（解散） *徒歩でJR久宝寺口（関西線・大阪ひがし線）か近鉄久宝寺口駅へ

八尾市立歴史民俗資料館（八尾市千塚三丁目180-1）TEL:072-941-3601

費用：約1000円（電車 服部川～河内山本150円、入場料50円と昼食代 近鉄八尾駅付近のレストランで各自とる）入場料は現地徴集。

その他：昼は近鉄八尾付近で自由解散してとります。少し遅めになるので、朝食を十分とってきてください。2回生がレジメを用意し案内します。

連絡先：卒業生で参加希望の方は10月5日（木）までに、電子メールで、M1・TAの張穎知 nicolezyz@yahoo.co.jp または教員責任者まで、氏名・回生、卒業生の区別、携帯連絡先をご連絡下さい。

教員責任者：野間晴雄、松井幸一

2. 地理学研究会第106回例会（研究例会）のご案内

日時：2017年12月9日（日）15時研究例会開始 18時懇親会開始

会場：関西大学 第1学舎（A棟）3階A301教室

講演：橋本啓吾（JR西日本）「10年間を振り返って～関大生から鉄道人へ～」

石川雄一（大阪商業大学）「人口減少社会と西九州中規模都市における空間構造の変容に関する課題 -住宅誘導、公共交通再生、商業まちづくり-」

木庭元晴（関西大学）「飛鳥の幾何学」

*なお例会の冒頭で博士課程前期課程学生が、本年度尾道市で実施しました実習調査について報告いたします。

*恒例の懇親会は大学正門前関西大学会館南館4F「チルコロ」にて実施します。会費は3000円です。懇親会に参加ご希望の方は11月30日（木）までに電子メールでM1の張穎知 nicolezyz@yahoo.co.jp まで氏名、携帯連絡先をご連絡下さい。

教室だより

■平成29（2017）年度の地理学・地域環境学教室の新入生は2回生に21名、大学院博士課程前期課程に1名（上海出身）が入学しました。4月20日（木）に学内の「チルコロ」で歓迎会を開催しました。地理学教室の3回生は16名、4回生は31名、博士課程前期課程5名、博士課程後期課程3名（2名休学）、の計77名となりました。10月1日現在、9月卒業1名が出たため教室の人数は76名です。

■恒例の「地理学・地域環境学実習」のバスによる1泊巡検は5月20日（土）～21日（日）に高砂・竜野・赤穂市方面でバス1台にておこなわれました。

■大学院合同演習は地理学・地域環境学実習室で7月15日（土）におこなわれました。

■昨年度に引き続き関西大学創立130周年記念のグローバル奨学金を利用したベトナムでのフィールドワーク研修を9月5日～12日の期間でおこないま

した。専修の希望者6名がベトナム国家大学ハノイ理科大学地理学部の学生とハノイ旧市街の商店・建物・土地利用の調査とGISによる地図作成をおこないました。次号にその報告を形成します。

■2017年度3月～9月の教員の海外出張は以下の通りでした。

①伊東理：ニュージーランド（3月24日～4月5日）オークランド市における小売商業の地域政策と小売商業地区の実態に関する調査（私費）②イギリス（8月3日～22日）エスニック・コミュニティの小売商業に関する調査（私費）③松井幸一：ベトナム（9月5日～10日）ベトナムでのフィールドワーク引率（私費）④野間晴雄：ベトナム（9月7日～12日）ベトナムでのフィールドワーク引率（私費）

■大倉俊様より地理学教室研究会・同窓会に寄付をいただきました。

松尾優介

高校の時は地理と世界史が好きでした。バンドが好きで、楽器を演奏するのが趣味です。よろしくお願ひします。

松原太陽

どうも、八尾市の最終兵器です。子供の頃は毎年、クリスマスのサンタさんからのプレゼントが新年度の地図帳でした。時々、バイクに乗って日帰りでツーリングに行きます。生活に全く役立たないムダ知識が大好きです。よろしくお願ひします。

三好拓也

以前サッカーをしていたため、サッカーのゲームや試合をテレビで見ることが好きです。他に、ラグビーの試合もよく見ます。好きな食べ物は、フライドポテトです。よろしくお願ひします。

村上綾太郎

奈良出身です。子供の時からよく地図を眺めて楽しんでいました。F1が好きでよく見えています。よろしくお願ひします。

安部真依

神奈川県出身で東京の短大卒業後に関大の地理に編入学してきました。地理のことはまだまだですが頑張るのでよろしくお願ひします。

日本では古代から灌漑用水路の建設など、小規模な河川の改修あるいは環境改変が行われ、中世～近世にかけては輪中や霞堤など、各地で多様な治水・利水技術が発達した。江戸期になると、現在からみても信じがたい規模で河川改修が行われるようになった。大和川や利根川の流路変更はその代表例であろう。とくに「利根川東遷」は、江戸の街の水害軽減だけでなく、関東経済圏と東北経済圏を結び付ける内陸舟運の確保という意味も大きかったとされる。これらの大事業を見るだけでも、河川をめぐる土木インフラストラクチャの整備は、江戸期においてすでに「近代化」されていたと言えるのではないかとと思われるほどである。

しかし一般的には、河川改修の「近代化」は明治期以降に行われたとされる。明治期には、お雇い外国人としてオランダから河川技師を招聘し、各地の河川改修を進めることになった。実は、近年「伝統工法」として注目・再評価され、各地の環境配慮型の河川改修で採用されている技術は、その多くが明治期にオランダ人によって導入あるいは整備・規格化されたものである。100年余りの時間を経て、「近代」技術が「伝統」技術になったプロセスはどのようなものであったのだろうか。技術史の観点から見ても興味深い。

そもそも明治期において河川管理をなぜオランダ人技師に依存したのか、ある種の謎であった。国土の多くが干拓で作られた低平地オランダの技術で、急峻な地形を持つ日本の河川環境をコントロールできるのかという議論は、明治期から存在していた。ただ、オランダには、日本と地形的類似性のある植民地ジャワ島での治水・利水の経験があった。実際、日本にきたオランダ人技師は、明治政府に対してまずはジャワ島視察をするようにと、何度も進言していたのである。

明治後半から大正、昭和初期にかけては、アメリカやオーストリアなどからも治水・利水技術が導入されるようになり、日本に定着したそれらの技術が、大正～昭和前半には、台湾や朝鮮半島へと伝えられることになった。特に昭和期になってからは、両地域で「東洋一」や「世界最大」と形容される灌漑システムや発電用ダムが建設されるなど、技術の実験場としての様相さえ呈していたようであるが、おそらく現地のローカルな技術や制度、知識・知恵などと融合したものもあったと推測できる。これらの点も近年の植民地科学者研究の新展開に寄与しうる調査対象であると思われる。そして、植民地で

活躍した技術者や役人、コンサルタントらは、戦後、日本におけるさらなる河川開発に寄与したり、東南アジアをはじめとする世界各地での河川事業に携わったりするようになった。

第二次世界大戦後、日本の治水・利水技術は世界随一と言われるようになった。この技術は、戦国・江戸期以降の大規模河川改修のなかで基礎が構築され、明治期以降、オランダをはじめ各国からもたらされた治水・利水の技術と融合する形で発展し、植民地での技術開発・革新の経験を経て、戦後の賠償問題とも絡みつつ「開発援助」という形での治水・利水技術の世界的展開へと結びついていく。そこには非常にダイナミックな技術伝播と環境改変の歴史があった。

ちなみに、20世紀末以降の動向については、ドイツ・スイスの環境配慮型の河川改修技術が導入され、その流れのなかでいわゆる「伝統工法」が復活し、そうした技術も東南アジアを中心に海外移転されるようになってきている。実は、1990年代以降の環境配慮型の河川改修（いわゆる「多自然型川づくり」）は、日本では失敗に終わったという評価もあるが、それにもかかわらず、こうした技術がなぜアジアで急展開しているのか。これも、技術や制度、さらには政治にも関わる重要なテーマとなる。

明治期以降の治水と利水の150年の歴史を、日本を中心に東アジア・東南アジアの範囲で見ること、とくにその技術移転の展開過程を、現地の社会・自然環境の変化との関係から考察することは、環境史やグローバル・ヒストリーの観点からも非常に興味深い。こうした点について、現在、学生たちとともに調査を進めているところである。

（そだりょうじ：大阪市立大学文学研究科准教授・本学非常勤講師）

千里地理通信 第77号

2017年10月1日 発行 (400部)

関西大学地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35

関西大学文学部地理学・地域環境学教室内
編集担当：松井幸一

TEL：06-6368-1121(内線4890：大学院生室)

E-mail：kandaichiri@gmail.com

URL：http://www2.kansai-u.ac.jp/kugeoenv/

郵便振替：大阪00970-4-81149